

奈良町の会所のルーツと特色

な
ら

民俗通信

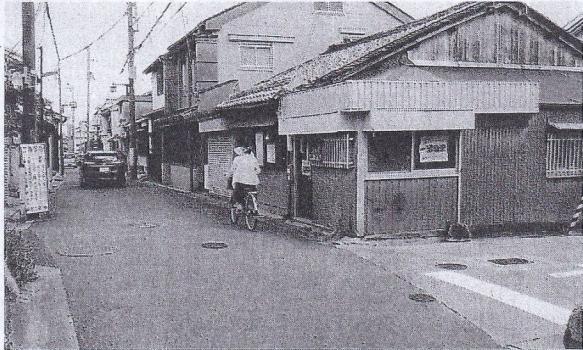
□277□

—奈良町モノ語り調査から⑤—

奈良まちづくりセンターは文化庁の助成を受けて、奈良町に遺る(のこ)る家具・器物・道具などのモノによって生活文化を浮き彫りにする「奈良町モノ語り調査」を行ってきた。2年目の昨年度は、手貰てがい町と井上町自治会の協力を得て両町の会所を調査した。会所は奈良町に約40ヶ所が残る。自治会の集会所のことだが、奈良町の会所は中世以来の歴史があり、集会の場と信仰にかかる伝統行事の場といつづの顔がある。

▼会所のルーツは「郷の堂」

奈良町は、旧平城京の外京(けきよう)の地で発展した。平城京の左右両京は都が長岡京、さらに平安京に移ったあと多くは田畠となり、トネ(刀禰)郷の代表者は年により交替に出す。惣(総)郷のこと



中世の薬師堂郷(町)の門跡に現存する「薬師堂」(条家)。奈良町は、古くから薬師堂郷として知られる。現在は江戸時代の写本。天理



中世以来の歴史いまも

人々や商工業者らが住み、興福寺七郷や元興寺郷などの「門前郷」が生まれ、これらが奈良町の核となつた。これらの小郷には、「郷の堂」「地下(じげ)の堂」と呼ばれるお堂が建てられた。これが小郷で祀(まつ)る社とともに奈良町の会所

7年4月28日の条に、奈良町の会所は今はない。本尊

・薬師如来坐像(平安時代、像高約87cm)は鳴川町の徳融寺にあり、觀音堂の内陣脇の立派な厨子(くりこし)によつて「薬師如來坐像(けんぞう)」は受け継が行われ、祭祀(じさい)

井上町の会所は、町に伝わる「井上町中年代記」(奈良市指定文化財)の記述により江戸時代以来、町内上の街道(上々道)へかみ(みち)沿いにあつたことが分かるが、昭和11(1936)年、東西の幹線道路建設に伴い、現在地に移転・新築され、近年、鉄筋コンクリートで建て直された。

「奈良坊目拙解」によるところ、会所はもと寺庵で、いま会所の厨子に祀る十一面觀音立像2体(鎌倉時代の1体は奈良市指定文化財)は、この寺庵の本尊だったことがある。今後、会所の西隣には井上(いがみ)神社を祀る。

清水 和彦

□277□

のルーツとなつたとされ

(大意)
この薬師堂は、尋尊筆で最も古い奈良町絵図「大乗院門跡図」(今残る

観音堂を増築して祀つた事情が明らかになった。それ以前は薬師堂町の近くの寺

社東側にあったが、国道の拡幅に伴い昭和14年、現在地に移転・新築された。八

鉄神社とともに会所前庭の石の厨子に地蔵尊を祀る。

谷直樹ほか「旧奈良町の会所建築について」(1984年)は、奈良町の会所を(1)神堂型(2)神祠型(3)仏堂型(4)町家型に分類した。これによると、薬師堂町は堂が失われたが(1)型、井上町は(3)型、手貝町も現在は(3)型に属する。

「奈良坊目拙解」には「奈良町は天正慶長以前は小郷が点在していた。郷で祀る社ない草堂(小堂)が会所となり、町並みが繁多となつた今もその余風がある」という記述がある。

奈良町は、京都や大阪ほどには都市化が進展せず、戦乱や大火に遭うことも少なかつた。このため、中世以来の会所のかたちや伝統をより色濃く保持してきた。会所を通じて奈良町のもう一つの特色が明らかになつたと考える。

薬師如來坐像は、奈良市調査で脚部の内側に「薬師堂共用物」などの墨書きがあることが分かつていて。奈良町の会所の厨子に祀る十一面觀音立像2体(鎌倉時代の1体は奈良市指定文化財)は、この寺庵の本尊だったことがある。今後、会所の西隣には井上(いがみ)神社を祀る。

井上、手貝町の会所(会館)は、良まちづくりセンター理

事)。次回は9月7日付掲載予定。